柿生文化

平成２０年　７月１８日
川崎市立柿生中学校
郷土史料館情報・研究誌
第　１　号

創刊に寄せて　「温故知新」　の心を大切に
～文化の発進基地としての柿生中学校を～

柿生中学校長　板倉　敏郎

「温故知新」（古きをたずね、新しきを知る）という言葉があります。わたしたち現代人は、何百年、何千年という祖先の知恵と努力に支えられ、今日の豊かな生活を営んでおります。それは大変有り難いことであります。私たちは、常に祖先の残してくれた〝思い〟や作り出された〝文化〟をふりかえりながらこれからの未来を考え、新たな文化を創造していく必要があると思います。

柿生・岡上地域は、歴史的にも古く、多くの縄文・弥生遺跡をはじめ、たくさんの古墳も発見され、中世、近世においても多くの歴史的文化遺産が残されています。

文化的にも、古くから鶴見川との関連が深く、川の流域各地には共通の文化的様相が沢山みられます。川崎市の多くが武蔵の国、橘樹（たちばな）郡であったにもかかわらずこの地域が、かつては、都筑郡であったことからも現在の川崎市のなかでも特異な歴史と文化圏を持っていると考えられます。

そのような意味からも柿生が川崎市の中にありながら、また別の独特の文化を持っているという視点から考えるとその視点にあった地域独自の文化財の公開施設が望まれるところであります。

平成２２年春に完成する柿生中学校では、これらの地域の思いとニーズをふまえながら新校舎のなかに造られる特別活動室を活用して郷土史料館（仮称）を開設する予定でおります。

この史料館は、第１番目に、市民ミュージアムに協力をお願いしながら地域の文化的遺産を展示公開したいと考えています。

第２番目に、社会科などの学習活動にも生かすために教科書等に登場する歴史史料の実物を展示し、単元によっては実際に授業をこの史料室の中で展開します。ここでは実際に生徒が実物史料を手にとって観察したり研究する活動も行ないます。

第３番目に、展示史料をもとに外部から講師をお招きして公開講座を開催します。すでに平成１８年度から本校で定期的に開催している「柿中カルチャーセミナー」です。更に充実した活動ができるものと思います。

第４番目に、地域に関する出版物や研究資料などの図書資料を開架し、地域の方にも閲覧できるようにします。

第５番目に、柿生地域の文化の発進基地として、地域の皆様に文化的な情報をお伝えしていくとともに日常、地域の方々にも開放し、地域の文化的コミュニティーの場としても機能させてまいりたいと思っております。

校舎改築とともに以上のような活動を進めてまいりたいと思っております。なお、史料館の運営については、地域の皆様のボランティア活動におたよりしなければならないこともたくさんございます。なにとぞご支援のほどよろしくお願い申し上げます

職員一同、地域の皆様とともに歩める新しい視点に立った学校づくりをめざして鋭意努力してまいりたいと思っております。今後とも、どうかご理解とご協力をたまわりますようよろしくお願いいたします。

地域に活用される文化の拠点を目指して

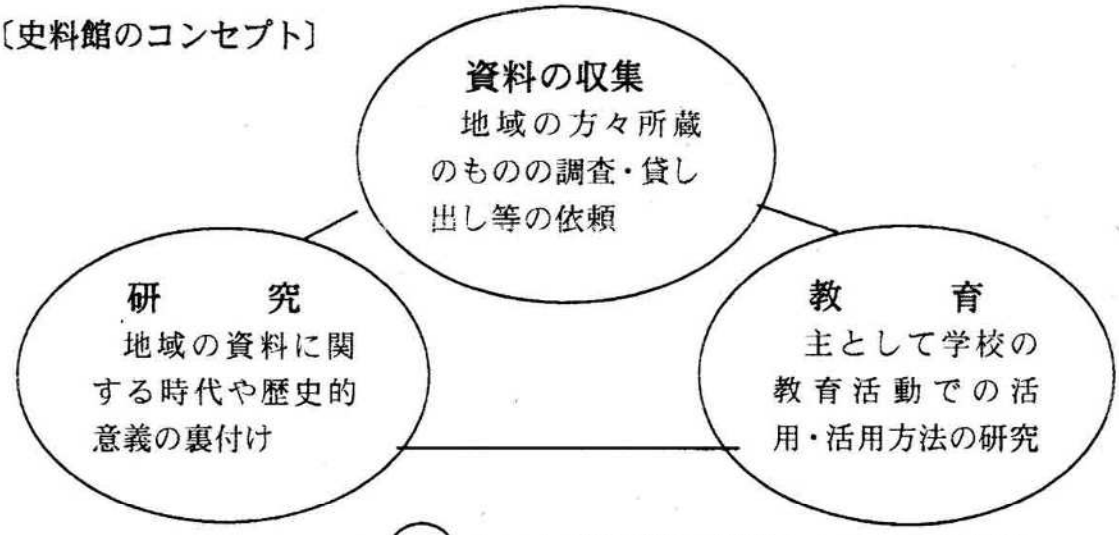
～資料の収集・教育普及・研究を～

柿生中学校　　黒川　保之

いよいよ校舎改築も始まり、川崎市としては初めての試みといえる郷土の史料館の設置が期待されています。一般教室３つ分の広さを有し、「地域の資料の展示」「授業で活用できる財の展示と研究」「地域の歴史研究」と役割は多岐にわたることが想像できます。ただ「郷土史料館」のベースは、地域にテーマを絞って展示計画を進めていくようにしなければ、単なる「なんでも屋の倉庫」的な空間になってしまう危険性もあり、その点でも市民ミュージアムや郷土の歴史研究会の御協力なしでは成立し得ないと思われます。また運営に関しても地域のボランティアの協力なしでは開館が物理的に不可能な状態であることは言うまでもありません。地域に育てていただく施設ということができます。

さて史料館の役割は通常下図のような役割になります。その役割をどのように担当していくかが現在の大きな課題となっています。

〔史料館のコンセプト〕



＊ ◯ 内の文章は本校の施設においての想定例

	地域のコーナー	学習活用のコーナー
収集	市民ミュージアムでの柿生地区の資料収集（市民ミュージアム）	地域の教材化できる資料の検索・収集　（史料館担当職員）
研究	市民ミュージアムでの柿生地区の研究成果（市民ミュージアム）	指導案作り　（史料館担当職員） 企画展　（地域の郷土史家等）
教育	カルチャーセミナーでの講座（市民ミュージアム）（地域の講師）	社会科とくに歴史的学習等での授業（社会科担当職員）

「郷土史料館」としての充実を図るには、その展示や運用に関しては様々な方々に関わっていただかなければならない状況にあります。多くの方のご協力をお願いすることになります。よろしくお願いいたします。

約５０名の参加者で会場満員

小島一也氏、柿生のルーツを語る

～第８回、柿中カルチャーセミナー(7/4)～

第８回柿中カルチャーセミナーが、７月４日（金）午後５時３０分より柿生中学校校長室で開催されました。約５０名の地域の方々がお集まりくださいまして熱気溢れる講演会となりました。

今回のテーマは「ふるさとのルーツを探る～映像を見ながら～」をテーマにして元かきの実幼稚園園長・元市議会議長・現麻生区観光協会会長の小島一也氏よりご講演をいただきました。

氏のお話のなかで、とても印象的であったのは、柿生の文化のルーツとして鶴見川流域に広く分布している「杉山神社」との関わりで、そもそも大和地方に縁のあった忌部氏（斎部氏二いんべうじ）との関係を指摘され、多数の専門的職業集団を伴って鶴見川河口より入り、上流に向かいながら開墾した。そして「杉山神社」は、開墾し支配を確立した証として建てられたものであろう。かつてはもっとたくさんの「杉山神社」が存在したが合祀されて今では別の社名に変わってしまったものも多数あるであろうとご指摘されました。

柿生周辺も忌部氏による開拓地のひとつであり、町田市の「三輪」「奈良」などの地名も関連があるとのことでありました。

氏がよく「鶴見川文化圏」という言葉を出されますが、まさにこのお話のことであり、柿生のルーツについて実によく理解できるお話でした。

第9回　柿中カルチャーセミナーのお知らせ

柿生・岡上に見られる石塔・板碑や お墓から地域文化の姿を浮き彫りにします

日　時　平成２０年９月１８日（木）
午後５時３０分より

会　場　柿生中学校　会議室　（冷房完備）

テーマ　「石造物にみる柿生・岡上の
中世から近世初期の姿」

講　師　郷土史研究家・西高津中学校講師
中西　望介　氏

史料館収蔵品紹介

「ていきんおうらい
庭訓往来」　(江戸時代)

江戸時代に寺子屋の教科書としてよく使われたものです。もともと南北朝時代から室町時代初期にかけのもので僧玄恵の作と推定されています。内容は、１２ヵ月に並べた２５通の手紙文からなっており、手紙の書き方や文字の練習として使われていました。江戸時代になりますと絵入本も含め各種刊行され、武士の家庭や寺子屋の初等教科書として全国に普及しました。特に庶民の日常生活に必要な語彙に重点がおかれています。

ちなみに「庭訓」とは「論語」のなかに出てくる故事で、昔、孔子の長男である伯魚が庭を通り過ぎようとした時、父の孔子に呼び止められ、「詩」と「礼」の大切さを教わったことから、家庭の教訓・家庭教育のことを指す言葉となったといわれています。

この当時、寺子屋で使用されていた教科書は、非常にたくさん出版されていますがかなりぼろぼろの状態で手垢にまみれたものが多く、兄弟や先輩・後輩、知り合いと次々に回されて使用されたようです。おそらく何十人という子供たちが使用したものと思われます。中には、たくさんのいたずら書きがされているものもあります。

編集後記

第１号の郷土資料館（仮称）の研究誌「柿生文化」が出来上がりました。本来は、郷土資料館が完成したところでこのようなものが出来上がったほうがよいのではないかと思いますが、すでに郷土資料館の活動のひとつである「カルチャーセミナー」も既に８回目を数え、郷土史料館としての活動がすでに始まっています。そのような意味からも、平成２２年春の校舎完成と同時に開館される郷土史料館の土台造りとしてこの「柿生文化」の刊行を位置付けました。息の長いものにしてまいりたいと思います。どうかご支援のほどよろしくお願いいたします。